

●緑と潤いの空間

「かきつばた衣(きぬ)にすりつけ丈夫(ます)らお)の着そひ狩する月は来にけり」(大伴家持)カキツバタはアヤメ科。万葉集に詠まれた植物の歌を記した高札が、その植物のわきに立てられている都城市・万葉植物園。霧島盆地の地下二百メートルを流れる伏流水が、わき出ている早水総合公園内にあり、一九八三(昭和五十八)年、一・六畝の和式庭園の植物園として開設された。開設以来、万葉植物の収集に努め、現在、草本類四十七科九十二種、木本類四十八科二百五十八種を展示。の中には絶滅が危ぐされる植物である水草「アサザ」なども含まれている。

公園内の「緑の相談所」には、九一(平成三)年発行の「万葉の花々」に続く同園前管理人・稲元透さんの九八(同十)年発行「万葉植物園あれこれ」の解説、案内書が用意され、興味をそそっている。



万葉植物園。貴重な植物が万葉への詩情を誘う

早水地区は島津家発祥の地で、都城市でも古い歴史ゾーンである。その中心が早水総合公園。ここにある五つの池の周辺には、市の花であるアヤメをはじめアジサイ、ツツジなどが植えられ、季節に彩りを添えている。また園内を流れる茜川は、髪長媛(かみながひめ)が産湯に使ったという泉水を水源としており、そのせせらぎは、四季折々の草木や野鳥のさえずりと調和し、万葉への詩情を誘う。

万葉植物園と並んで、健康都市づくりを進める都城市の新しいスポットに「高木原緑道」がある。九五(同七)年度の都市景観大賞を受賞。郡元町の沖水川と下長飯町の萩原川を結び、全長約五・八^キ。日本一長い公園とも言われる。

前身は高木原水路。一四(大正三)年の着工から八五(昭和六十)年まで、総延長十八^キ。の農業用水路は周辺約五百^畝の田を潤してきた。

現在は揚水ポンプで田に水を送っている。

用水路廃止で跡地を整備したのが高木原緑道。市街地に緑と潤いのある空間の創出を狙いに整備、二〇〇一(平成十三)年度に完成した。

緑道は用水路のトンネルをかたどったモニユメントなどがある「高木原の広場」、スペイン在住の画家・又木啓子さんがデザインした「北泉橋」、イタリア在住の彫刻家・緒方良信さんの彫刻「水の道」がある「水辺のみち」など五つに分かれている。散歩、憩いの場として市民は「新しい都城の名物に」と熱い視線を送っている。

塩水流忠夫